

鉄器時代の石器

—中エジプト・アコリス遺跡の石器利用—

遠藤 仁

Lithics from Iron Age Akoris, Middle Egypt

Hitoshi ENDO

キーワード：アコリス遺跡、末期王朝、鎌刃、デポ、一括廃棄

Key-words: Akoris, Late Period, sickle blade, depot, lithic refuse

はじめに

本稿では、筆者が2002年から参加している、エジプト・アラブ共和国のアコリス遺跡の石器について紹介する。

アコリス調査団は川西宏幸団長を中心に、およそ四半世紀にも及ぶ調査を当地で行なっている。そして、本調査団からは、数多くの優れた研究報告がなされている。本稿は、

それらに及ぶものではないが、希少な紹介事例ではある。

あまり報告事例のない、末期王朝というごく新しい時期の資料を紹介することは、当地、当該期の研究に多少なりとも寄与できるものと考えている。

鉄器時代の石器

エジプトにおいて、王朝時代終末の石器研究は前時代と

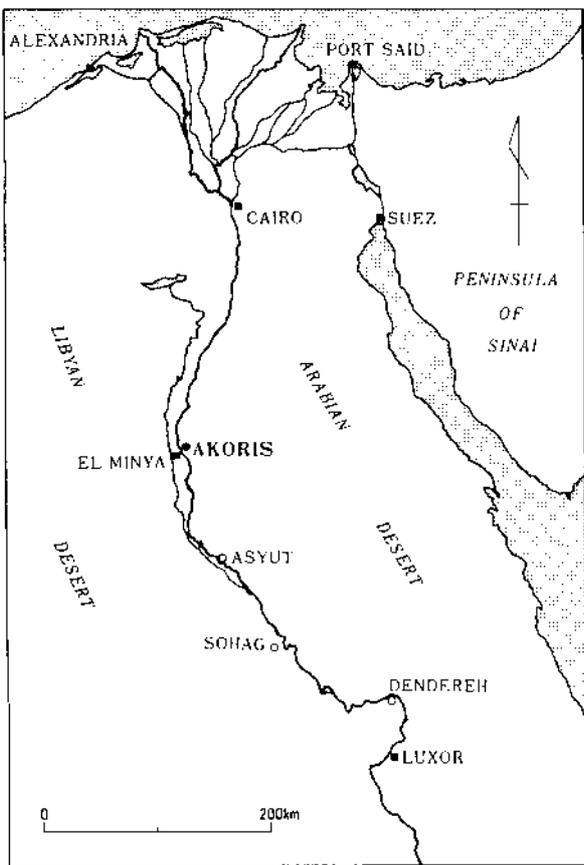


図1 エジプト地図

(Kawanishi and Tsujimura 2004: Fig. 1)

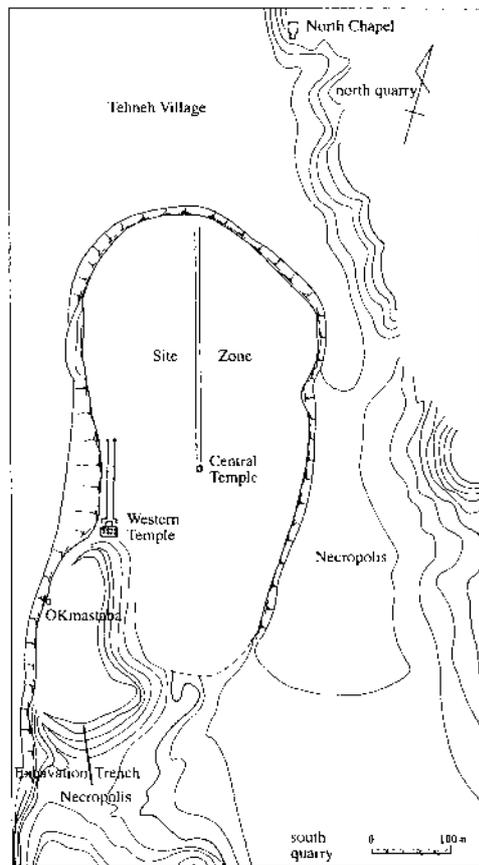


図2 アコリス遺跡地図

(Kawanishi and Tsujimura 2004: Fig. 3)

比較して進んでいないのが現状である。先王朝時代から王朝時代盛期にかけては、数多くの研究事例があるが (Holmes 1989; Tillmann 1999 等)、本稿で対象とする末期王朝期以降は前述したように報告事例すら希少である¹⁾。この時期以降、少なくともローマ時代まではフリント製剥片を素材とした石器の利用は認められるが、その多くは石製容器製作用のスクレイパーや、石材に文字や記号を刻む刻印器等である (Stocks 2003)。

エジプトは、フリントという石器製作に適した石材が多く、多くの場所で入手できる環境にある。金属器が出現し、流通し始めてからも上記の例のように、いくつかの工具はフリント製石器に依存していたことは確実である。その利用規模は、現状では明らかにすることは困難であるが、当時の生活復元には欠かせない要素の1つであろう。

アコリス遺跡の概略

アコリス遺跡はカイロから南へ約 230 km、ナイル河東岸に位置し (図 1)、現在のテヘネ・エル・ジェベル村の下に眠る古王国時代以降約 3000 年間の人類の活動の痕跡を残す遺跡である。遺跡の中核は、第 3 中間期からコプト時代にかけての都市域である。遺跡は、耕作地と東方砂漠の境界を形成する石灰岩の河岸段丘の狭間に立地し、東から北側にかけて涸れ谷 (Wadi) に囲まれている。都市域は南北 600m、東西 300m を測り、その周囲に生業域、墓域が存在する (図 2)。

2002 年のシーズンから、都市域の南側に位置する岩山の南側斜面をトレンチ調査している。図 3 は 2003 年のシーズンまでの成果で、東西 8 m、南北 80m を測るトレンチの平面図である。なお、現在 (2004 年調査時) はトレンチ北側 50m の範囲を西側へ 10m 拡張している。この岩山南斜面は末期王朝時代のセトゥルメント (川西 2005: 70) であり、これまでに以下のことがわかっている。

- ・斜面中腹に幅 1.4m 余りの大壁が東西に築かれており、この大壁を中核としてセトゥルメントが形成されている。
- ・大壁の機能は一種の望楼、ないしフォートレスであったと考えられる。
- ・南北約 6 m、東西 14m 以上の細長いプランをもった、大規模な皮革工房址が確認されている。
- ・銅または青銅関連の工房址が確認されている。
- ・直径 5 ~ 2 m 程の円形の穀物倉が多数確認されている。
- ・トレンチ南端付近より多数の円形炉が確認されている。
- ・セトゥルメント内部に埋葬址を伴う。
- ・このセトゥルメントの時期は 3 時期に細分でき、その年代は紀元前 5 世紀の中葉から 100 年ないし 150 年間継続していたと考えられる (川西 2004: 54, 2005: 71-72; Kawanishi and Tsujimura 2004)。

以上を前提事項として、本稿では、岩山南斜面から得られた 2003 年から 2004 年の 2 シーズンの出土石器について紹介する。

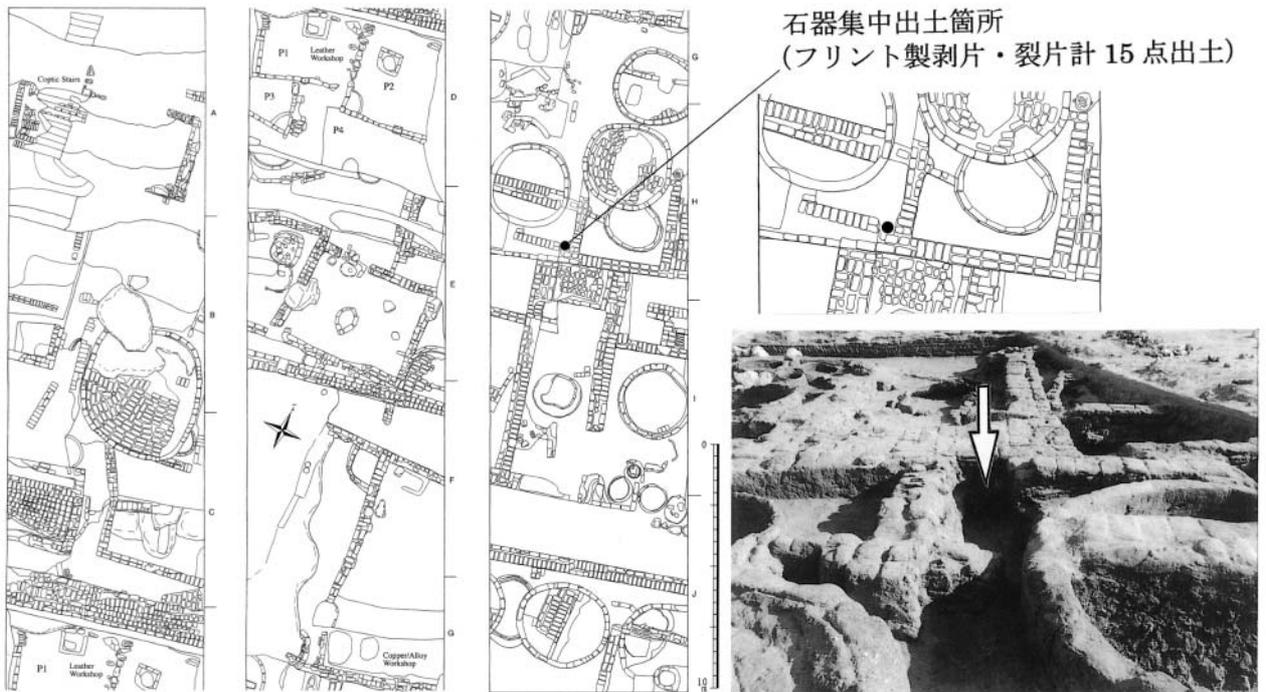


図 3 石器集中出土箇所 (左: Kawanishi and Tsujimura 2004: Fig. 5 に加筆。右: 筆者撮影)

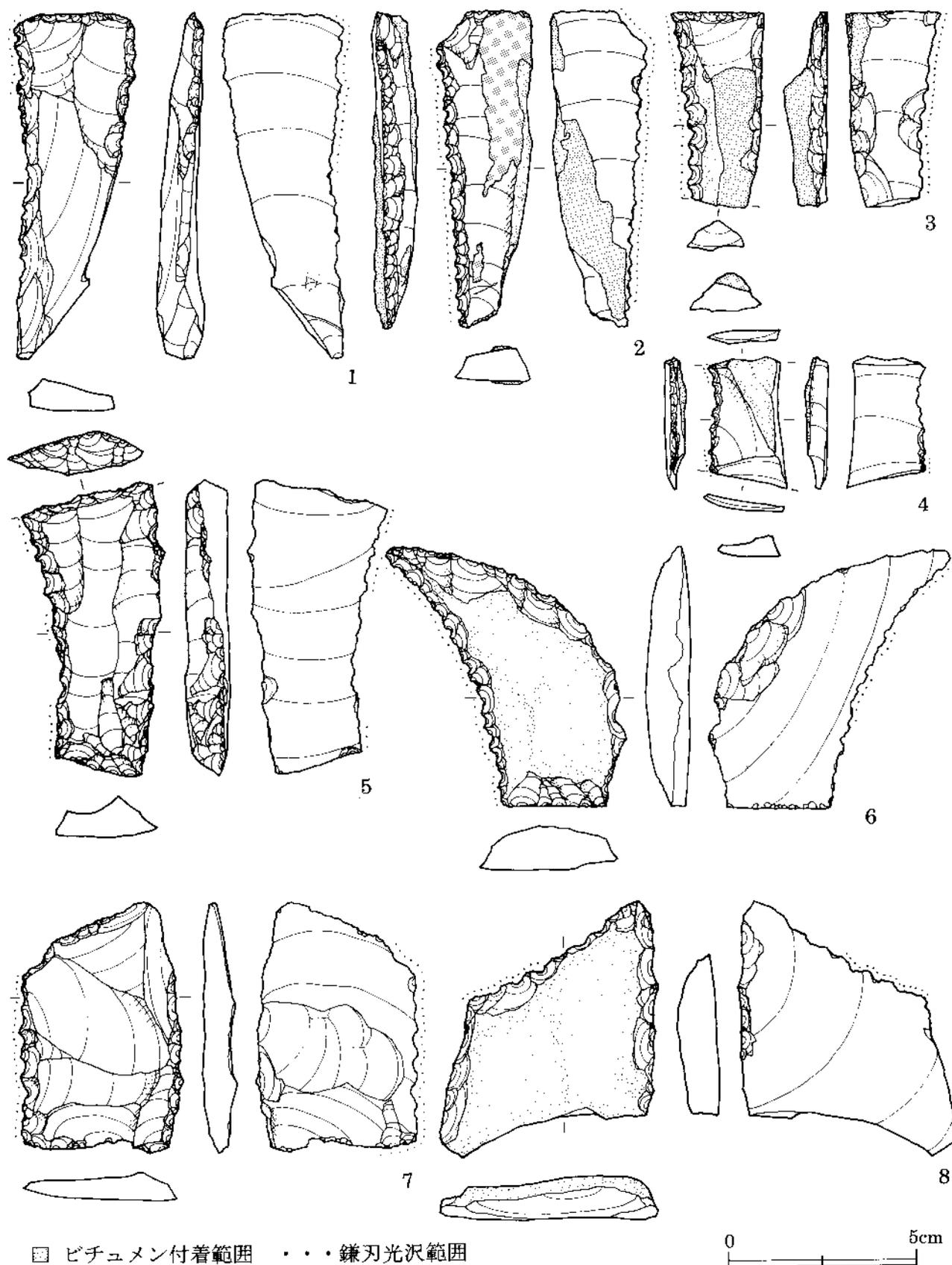


図4 アコリス遺跡出土鎌刃 (S=2/3)

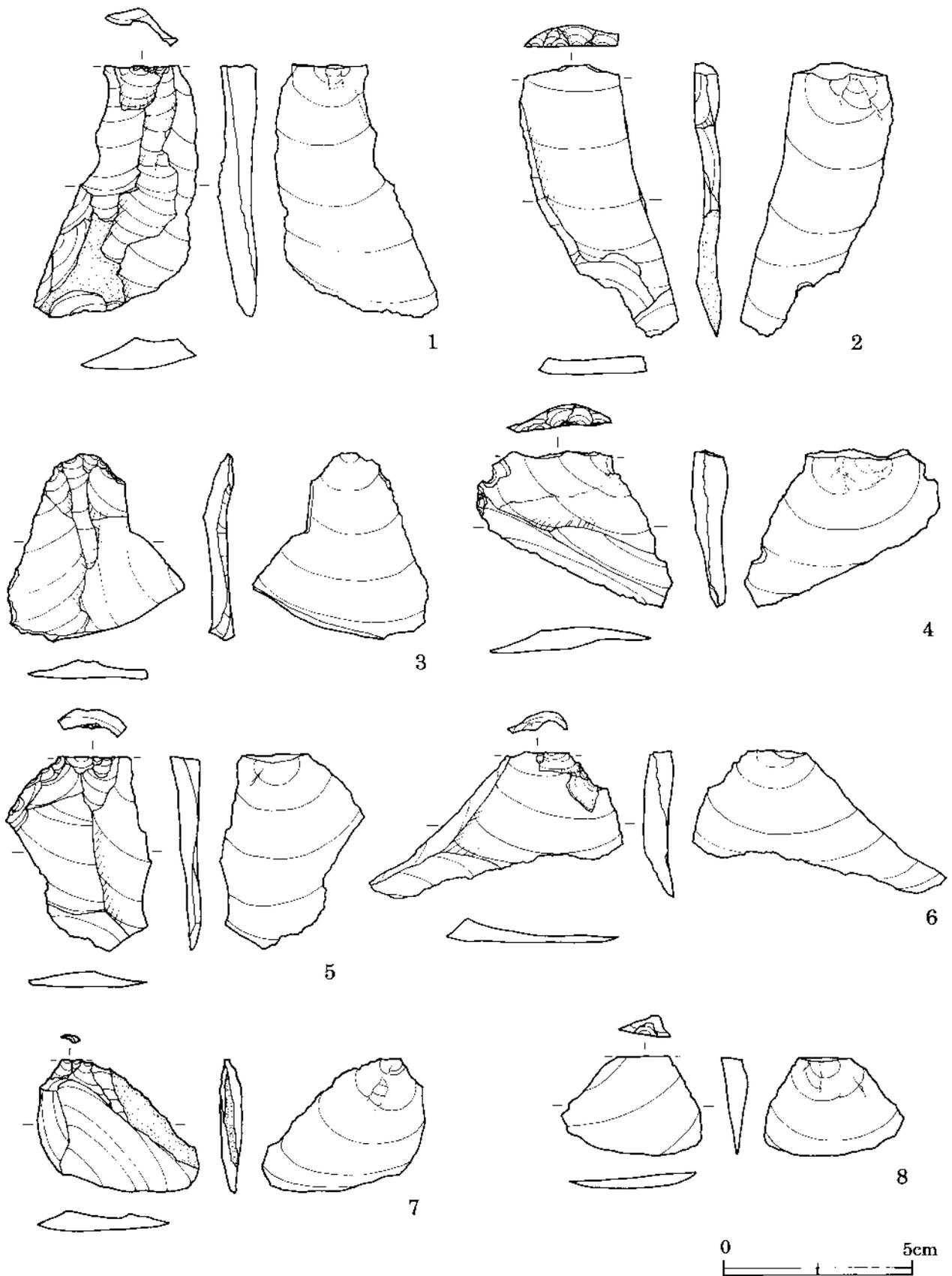


図5 アコリス遺跡出土剥片 (S=2/3)

岩山南斜面出土石器

この地区からは、以下紹介する鎌刃、剥片類の他に3点の石刃が出土しているが、本稿ではその事実を述べるにとどめる。

1. 鎌刃 (図4)

岩山南斜面からは、これまでに8点のフリント製鎌刃が出土している。出土位置はトレンチ中央付近から南端までと一様ではない。

まず、鎌刃の素材であるが、必ずしも石刃を素材としていない。いずれも肉厚であり、図4-1~5は石刃、もしくは縦長志向剥片を、図4-6~8は幅広の剥片を素材としている。図4-2、3、4、6、8のように素材背面に礫面を残すものが多い。次に、加工であるが、図4-1~3、5~7は両側縁及び端部に二次加工を施し、機能部にあたる一側縁を鋸歯縁状に加工している。図4-4、8は遺存状態が悪く、明瞭ではないが一側縁を鋸歯縁状に加工している。平面形態は、図4-1~5は、縦長の台形に成形しているが、図4-6~8は、前者のような定型的な形態に成形しようとした意図は認められない。また、図4-2、3は表裏にピチュメンの付着が認められる。鎌刃光沢は、いずれも鋸歯縁状に加工した一側縁にのみ認められる。

上記の観察から、これらの石器群につき以下のことが言及できる。

- ・ 鎌刃は、木製、もしくは骨製の柄にピチュメンを用いて装着されていた。
- ・ 鎌刃の機能部は一側縁のみであり、反転して使用するような技術は製作段階から意図されていない。
- ・ 鎌刃の刃部形態は、エジプトでは新石器時代以降確認できる鋸歯縁状である。

2. 一括出土剥片類 (図5)

岩山南斜面からは、石器集中箇所から15点のフリント製の剥片類が一括して出土している。その内訳は、剥片14点、裂片²⁾1点である。出土箇所は図3に示したように、円形穀物倉に囲まれた壁の袋小路である。おそらく、住居址の外側であろう。乱雑に固まった状況で見つまっている。

図5にはそれらの中の一部を提示した。図5-1、2のような縦長志向剥片もあれば、図5-3~6のような幅広剥片もある。また、図5-7、8のような石核調整剥片³⁾もある。

これらを概観して言及できることは、鎌刃の素材剥片とは考え難いということである。いずれも薄く、不定形であり、何らかの定型石器を志向して剥片剥離された目的剥片ではない。

3. 石器製作技術からの視座

まず、石器石材であるが、これは遺跡の周囲の石灰岩台地に求めることができる。フリントは、石灰岩中にノジュール状に産出される (Luedtke 1994)。現在も、遺跡周辺で見かける石は石灰岩を除くと、そのほとんどがフリントである。そのため、石器の原材料は、豊富に手近で入手できたはずである。

当該期の石器は、技術水準的には当地の過去の石器製作技術と比較して、高くない。例えば、新石器時代の明確な石刃製作技術を背景とした鎌刃の製作 (Holmes 1989) は、当地においても認められるが、それと比較すると末期王朝時代の鎌刃は肉厚で規格性が乏しい。また、剥片類を見ても、石核がないため明瞭ではないが、打面調整や、剥片背面の剥離面構成が多様で目的剥片の形態が読み取れない。

末期王朝時代終末、すなわち紀元前5世紀前後という時代背景から推測すると、この石器群は特定の集団、または個人により製作されていたと考えられる。なぜなら、分業が進み、複合化した都市社会においては、西アジアや南アジアの多くの都市遺跡において見られるように、土器製作、石器製作、冶金などは個々に専門化した集団の手に委ねられている。新石器時代ならいざ知らず、当該期の石器製作も特定の集団、または個人に委ねられていたと考えることは妥当であろう。ただし、技術水準的に高くないことから、石器製作のみの専門というよりも、他の石製品も合わせて製作するような兼業の可能性も考えられる。

金属製刃器が存在するという事実を考慮に入れると、当該期の石器群は、刃器として機能すればよいという意図のもと、製作していたと考えられる。そのため、石器の完成度に対する要求値が高くなく、前述したような、規格性の乏しい場当たりの剥片・石刃を製作する技術が用いられてきたのであろう。

4. 石器集中箇所とは何か

図3の石器集中箇所は、いかなる性格の遺構であろうか。前述したようにこれらは鎌刃の素材ではない。考えられる遺構としては、デポ (意識的な貯蔵遺構)、もしくは一括廃棄遺構がある。

これらは、何らかの石器の素材剥片ではなく、また、石核調整剥片も存在するため、一括廃棄されたものと考えられることができる。しかし、石核がなく、石器製作址もしくは製作の痕跡を示すような遺物・遺構も見つかっていない。また、前述したように当該期の石器製作技術は、型にはまったものではない。出土箇所は皮革製品や銅・青銅製品の工房址と住居址の狭間である。出土状況と、取り巻く遺構群の性格から、これらは生業活動の所産品の可能性が濃厚である。

種々の工房址をもつこの遺構群の性格から、これらがこの場で製作され、必要がなくなった剥片類がゴミとして一括廃棄されたという考えは成り立つ。しかし、当該期の石器製作の適宜性から、これらが特定の器種名称をもたない、剥片製刃器として使用することを目的に、一時的にこの場に保管されていたとの考えも成り立つ。現時点では、後者の見解が妥当であると想定しているが、判断を下すのは困難である。結論は調査の進展を待ち、論じたい。

おわりに

題目を「鉄器時代の石器」としたが、正確にはこの時期のエジプトにはデルタやテーベといった先進地では鉄器の流通が認められるが、アコリス遺跡では、銅もしくは青銅製品しか出土していない(川西 2003: 303)。正確には「金属器時代の」とすべきであろう。

金属器が流通する時期になっても、刃物系の利器を石器に依存するという現象は、エジプトのみならず多くの地域で認められる。筆者のもう一つの研究地域である南アジアでもそれは顕著に認められる(遠藤 2002)。それらが、金属器の流通事情によるものか、宗教・精神的な背景をもつ社会事情によるものなのかは議論の余地があるが、旧石器時代から有史時代に至るまで石器製作が連続と続いてきたという事実がある。従来、見落とされがちで、いわゆる金属器時代の資料に目を向けることは、複雑化した社会構造の復元に貢献できると思われる。

本稿執筆にあたり、川西宏幸先生、辻村純代先生をはじめとするアコリス調査団の皆様、エジプトとは無関係だった筆者に調査参加の契機をくださった山花京子先生には多大なるご教示を賜った。また、査読の方々には貴重な意見を賜った。文末ではあるが、記して感謝の意を表したい。

註

- 1) Tillmannによれば前600年以降は、情報が不明とされている(Tillmann 1999)。
- 2) 剥片剥離時に偶発的に生じた、打面・打瘤が明瞭でない剥片・碎片、節理面で割れたもの、被熱破碎剥片・碎片、自然破碎剥片・碎片もこれに含める。
- 3) 石核整形・再整形時に剥離された非目的剥片(遠藤 2002)。

参考文献

- Holmes, D.L. 1989 *The Predynastic Lithic Industries of Upper Egypt: a comparative study of the lithic traditions of Badari, Nagada and Hierakonpolis*. Oxford, B.A.R.
- Kawanishi, H. and S. Tsujimura (eds.) 2004 *Preliminary Report Akoris. 2003*. Tsukuba, University of Tsukuba.
- Luedtke, B. E. 1994 *An Archaeologist's Guide to Chert and Flint*. Los Angeles, University of California.
- Stocks, D. A. 2003 *Experiments in Egyptian Archaeology: Stoneworking technology in ancient Egypt*. London/New York, Routledge.
- Tillmann, A. 1999 *Dynastic stone tools. Encyclopedia of the Archaeology of Ancient Egypt*. 262-265, London/New York, Routledge.
- 遠藤 仁 2002 「デカン金石併用諸文化における石器生産の様相」『インド考古研究』第23号 25-48頁。
- 川西宏幸 2003 「古代都市アコリスの軌跡—生産と流通—」『古代エジプトの歴史と社会』299-315頁 同成社。
- 川西宏幸 2004 「エジプト・アコリス遺跡の調査2003」『今よみがえる古代オリエント—第11回西アジア発掘調査報告会報告集』54-57頁 日本西アジア考古学会。
- 川西宏幸 2005 「エジプト・アコリス遺跡の調査2004」『今よみがえる古代オリエント—第12回西アジア発掘調査報告会報告集』70-75頁 日本西アジア考古学会。
- 西秋良宏 1995 「放棄行動に関する最近の考古学的研究」『東海大学校地内遺跡調査団報告』5 151-171頁 東海大学校地内遺跡調査団。
- 西秋良宏 2000 「工芸の専門化と社会の複雑化—西アジア古代都市出現期の土器生産—」『西アジア考古学』第1号 1-9頁。
- 藤井純夫 1983 「鎌刃の装着法分類」『古代オリエント博物館紀要』第5巻 129-152頁。

遠藤 仁

東海大学

Hitoshi ENDO

Tokai University